

# 地方議会の派閥構成についての覚書

——新潟県六日町議会の事例——

星 明

## はじめに

本稿の目的は、新潟県下のある町議会の党派別構成を明らかにすることである。そうすることによって、今後、地方議会の派閥構成を視座として当該地域社会の権力構造をみるばあいの基礎作業として位置づけたい。

一般的にいつて、議会の無所属議員の比率は参議院地方区・衆議院の1%未満<sup>①</sup>（昭和五十六年六月二十二日執行）、都道府県議会の13・8%<sup>②</sup>（昭和五十四年四月二十二日執行、統一地方選挙）、市議会の59・2%（同上）である。本稿であつかう新潟県においては、県議会の無所属議員は1・5%（定員六五名中一名）であり、市議会では五五・六%（定員計六一〇名中三三九名）であり、町村議会では八八・七%（定員計一八八六名中一六七三名）である。<sup>③</sup>この数字を右の全国レヴェルの県議会および市議会と比較してみると、新潟県は県議については全国の比率よりかなり低く、市議については少し低い。また、町村議についてはほぼ同程度と理解してよいだろう。<sup>④</sup>いずれにしろ地方議会ほど無所属議員の比率が高く、かれらの大部分は保守系である。しかし、この保守系無所属が具体

的にどのように構成されているのかは、公にされた資料からは把握できない。実際に、当該地域の議会や住民に当たって見る必要がある。したがって、筆者はこれまでに新潟県庁、県議会事務局、県選挙管理委員会、県町村会、北魚沼郡湯之谷村役場、同村議会事務局、南魚沼郡六日町役場、同町議会事務局、県第三区選出の衆議院議員の後援会事務所などを訪問したり、何人かの議員や住民から聴き取りを行なった。そこから得た資料をもとに以下、地方議会の派閥構成を六日町議会を事例として述べていきたい。

## 一、六日町の概観

新潟県の南端、東の三国山脈と西の魚沼丘陵に囲まれた六日町盆地に位置する六日町は、面積二六二・五六平方キロ、世帯数六七三七、人口二七二二四（昭和五十三年三月現在）である。歴史的には、長尾政影の坂戸城の城下町として、三国街道の宿場町として、また信濃川の支流魚野川の舟運で商業の町として繁栄してきた。近年、道路の無雪化に加えて上越新幹線、北越北線、関越自動車道の開通が間近に予想されることから各種工場・施設の進出もめざましい。また、冬になれば関東方面からのスキーヤーたちでにぎわう観光の町でもある。

つぎに、後につづく考察との関連もあるので、人々および世帯数の推移、人口動態（特に社会動態）、年齢別推計人口、産業別就業者数などをみておこう。

第一表から分かるように人口はこの一〇年間ほぼ横ばいである（世帯数は約一・四倍になっている）。このように人口が安定していることは、政党支持についても変化がないことを予想させる。しかし、それは人口の社会動態をみなければ分からない。すなわち、転出・入者数が多ければ有権者の質が変化するので当該地域の議会構成に影響

第1表 六日町の世帯数・人口の推移

(各年3月末現在)

	世 帯 数	人口総数	男	女	増・△減 (人口)
昭和31年9月1日	4,772	27,826	13,865	13,961	
昭 和 35 年	5,077	27,053	13,353	13,700	△773
昭 和 40 年	5,400	26,558	13,050	13,500	△495
昭 和 41 年	5,528	26,970	13,268	13,702	412
昭 和 42 年	5,686	26,924	13,210	13,714	△ 46
昭 和 43 年	5,702	26,491	13,024	13,467	△433
昭 和 44 年	5,782	26,421	13,000	13,421	△ 70
昭 和 45 年	6,099	26,378	12,995	13,383	△ 43
昭 和 46 年	6,100	26,150	12,893	13,257	△228
昭 和 47 年	6,140	25,951	12,793	13,158	△199
昭 和 48 年	6,291	26,231	12,940	13,291	280
昭 和 49 年	6,479	26,621	13,164	13,457	290
昭 和 50 年	6,658	26,997	13,344	13,653	376
昭 和 51 年	6,764	27,298	13,494	13,804	301
昭 和 52 年	6,757	27,378	13,531	13,847	80
昭 和 53 年	6,737	27,224	13,462	13,762	△154

資料：「六日町一町勢の概要，昭和53年度」。

響を及ぼすかもしれない（必ずしも転出・入者数を限定できないし、またどこから、何歳の、どんな職業転入者があるかで多様であるが）。それでは、この町の社会動態をみてみよう。

第二表にみられるように転入者計は一二一二人、転出者計は一五六一であり、当町の人口総数に占める比率はそれぞれ四・四％、五・六％である。この数字は、当町の議会構成への影響を無視してもよいほどのものであるう（この数字は〇——一九歳の転出・入者も含んでいるのでなおさらである）。

つぎに、年齢別推計人口をみよう。

第三表から分かるように、当町の有権者は一九二二六人であり、かれらの年齢階級別構成比は二〇歳代二〇・二％、三〇歳代一九・四％、四〇歳代二〇・八％、五〇歳代一七・七％、六〇歳以上二二・九％である。一般的にいつて、年齢の高さと保守系支持率の高さは正比例の関係にあるので、当町で

は、年齢構成上では保守系がやや優位である。

つぎに、当町の産業別就業者数をみておこう。職業は支持政党とも関係するからである。

第四表によれば、第一、第二、第三次産業のなかでもっとも高い割合を占めているのは第二次産業（三七・七％）である。しかし、単独の産業では農業の二四・六％がトップである。農民の保守系支持率が高いこともしばしば指摘されるところである。因みに、昭和五十年現在、当町の農家総数は二八八七戸で、そのうち専業農家五一戸、第一

第2表 六日町の人口動態（社会動態）

S 52 ・ 10 ・ 1	世 帯 数		6,817
	推 計 人 口	計 男 女	27,691
			13,806
			13,885
	転 入	県 内 計	596
		県 外 計	602
		その他計	14
社 会 動 態	転 出	県 内 計	678
		県 外 計	878
		その他計	5
	差 引		△349

資料：新潟県企画調整部統計課編，昭和54年3月，『新潟県の人口移動一昭和53年新潟県人口移動調査結果報告』p.34から作成。なお，人口動態は昭和52年10月から53年10月までのものである。

第3表 六日町の年齢（10歳階級）別推計人口  
(昭和53年10月1日現在)

年齢階級	人 口	年齢階級	人 口	構 成 比
0 ～ 9	4,502	20 歳 以 上（再掲）		
10 ～ 19	3,850			
20 ～ 29	3,881	20 ～ 29	3,881	(20.2)
30 ～ 39	3,734	30 ～ 39	3,734	(19.4)
40 ～ 49	3,993	40 ～ 49	3,993	(20.8)
50 ～ 59	3,411	50 ～ 59	3,411	(17.7)
60 ～ 69	2,273	60 ～	4,207	(21.9)
70 ～	1,934			
計	27,578	計	19,226	(100.0)

資料：第2表に同じ。pp. 26-7 から作成。

第4表 六日町の産業別就業者

産 業	昭 和 35 年		昭 和 40 年		昭 和 45 年		昭 和 50 年	
	数	構成比	数	構成比	数	構成比	数	構成比
農 業 林 業 狩 猟 漁 業 水産養殖業 第1次産業計	8,364	63.5	7,291	54.4	5,804	40.3	3,495	24.6
	160	1.2	102	0.8	63	0.4	38	0.3
	17	0.1	25	0.2	17	0.1	22	0.1
	8,541	64.8	7,418	55.4	5,884	40.8	3,555	25.0
鉱 業 建 設 業 製 造 業 第2次産業計	104	0.9	315	2.4	233	1.6	42	0.3
	822	6.2	1,170	8.7	1,344	9.3	2,547	17.9
	821	6.2	940	7.0	2,414	16.8	2,776	19.5
	1,747	13.3	2,426	18.1	3,991	27.7	5,365	37.7
卸 売 業 小 売 業 金融・保険・ 不動産業 運輸通信業 電気ガス 水道業 サービス業 公 務 第3次産業計	1,125	8.5	1,325	9.9	1,752	12.1	2,093	14.7
	66	0.5	107	0.8	142	1.0	205	1.4
	291	2.2	417	3.1	473	3.3	543	3.8
	61	0.5	75	0.6	61	0.4	63	0.4
	1,108	8.5	1,372	10.2	1,784	12.4	2,014	14.2
	230	1.7	253	1.9	339	2.3	366	2.6
	2,881	21.9	3,549	26.5	4,551	31.5	5,284	37.1
分 類 不 能	5	—	—	—	—	—	31	0.2
合 計	13,174	100.0	13,393	100.0	14,426	100.0	14,235	100.0

資料；「六日町一町勢の概要，昭和53年度」。

種兼業農家六〇五戸、第二種兼業農家二二三戸、農家人口総数は一四四六七人である（昭和五十年、農林業センサスによる）。

以上、六日町の概観を主として統計的資料を通してみてきた。つぎに、六日町議会の構成をみるわけであるが、その前に新潟県の政界の概略をみておこう。

## 二、新潟県の政界

ここでは、衆議院議員、県議会議員、市議会議員、町村議会の党派別構成をみてみよう。

第五表にみられるように、衆議院においてはほぼ完全に政党化されている。第三区の無所属一は田中角栄である。それゆえ、新潟県における衆議院議員の自民党と社会党の比率は二対一である。また、第六表にみられるように、県議会もほぼ政党化が進んでいる。それによれば、自民党が約七割（四六人）、社会党が二割（一三人）を占めており、その他の政党および無所属は一、二名に過ぎない。昭和五十四年四月の統一地方選挙後の全国的にみた都道府県議会の党派別議席の比率は自民党五三・〇％、社会党一四・三％、公明党六・八％、民社党三・八％、共産党四・八％、新自由クラブ一・三％、社民連〇・二％、諸派一・九％、無所属一三・八％（うち保守系一一・一％、革新系一・五％）——計二八八二人（一〇〇・〇）——であった<sup>⑧</sup>。この比率を新潟県議会のそれと比較してみると、新潟県が全国平均を上回る政党は自民党と社会党の二党であり、他はすべて全国平均を下回る。同表の市議会はそれほど政党色が濃厚ではなく、自民党が約一五％（九四人）、社会党は約一四％（八四人）などであり、無所属が約五六％（三三九人）を占めている。新潟県の市議会の党派別議席数比率と全国的にみた市会のもので、自

民党一〇・二％、社会党一〇・〇％、公明党八・七％、共産党七・七％、民社党三・二％、新自由クラブ〇・三％、諸派〇・六％、無所属五九・二％、計二〇三一三人（一〇〇・〇）——とを比較してみると、新潟県が全国平均を上回る政党は自民党・社会党・民社党であり、共産党・公明党および無所属は下回っている。町村議会では五つの政党を合わせても約一割である

第5表 新潟県における衆議院議員の党派別構成

	自 民 党	社 会 党	無 所 属	計
新 潟 1 区	2	1		3
〃 2 区	2	2		4
〃 3 区	3	1	1	5
〃 4 区	2	1		3
計	9 (60.0)	5 (33.3)	1 (6.6)	15 (100.0)

資料；「朝日新聞」，昭和55年6月24日付から作成。なお，第3区の自民党3は当選後の追加公認1を含む。この数字は，昭和55年6月22日執行（第36回総選挙），衆院選のものである。

第6表 新潟県における県議会・市議会・町村議会の党派別構成

県 議 会		市 議 会	町 村 議 会
党 派			
自 民 党	46 (70.8)	94 (15.4)	51 ( 2.7)
社 会 党	13 (20.0)	84 (13.8)	57 ( 3.0)
共 産 党	1 ( 1.5)	42 ( 6.9)	60 ( 3.2)
公 明 党	1 ( 1.5)	20 ( 3.3)	15 ( 0.8)
民 社 党	1 ( 1.5)	23 ( 3.8)	7 ( 0.4)
県 政 会	2 ( 3.1)		
無 所 属	1 ( 1.5)	339 (55.6)	1,673 (88.7)
欠 員		8 ( 1.3)	22 ( 1.2)
計	65 (100.0)	610 (100.0)	1,886 (100.0)

資料；県議会は「新潟県議会議員名簿」（昭和54年5月17日現在）から作成。市議会および町村議会は『新潟県年鑑—1982年版』から作成。

り、無所属が九割近くを占めている。この傾向は、全国とはほぼ同じである。

以上、新潟県における衆議院、県議会、市議会、町村議会の党派別構成をみてきた。つぎに六日町議会の党派別構成に移ろう。同町議会も無所属の比率が高いことは例外ではない。一般的な傾向として無所属議員の大部分は保守系であるが、それでは具体的にどのような構成になっているのであろうか。それをつぎにみてみたい。

### 三、六日町議会の党派別構成

六日町の所属する選挙区は衆議院選では新潟第三区（定員五名）、県議会選では南魚沼郡選挙区（定員二名）である。有権者数は、昭和五十一年十二月二十五日執行衆議院議員総選挙時、一八九一七人である（第三区全体では五三万一六五人。新潟県選挙管理委員会、昭和五十二年、『選挙の記録』から）。

まず、衆議院、県議会における党派別、候補者別の得票数および得票率をみておこう。

第七表の党派別得票率からみると、第三区全体と比較して六日町の方が高い政党は社会党（五・九％高）・共産党（一・三％高）・公明党（〇・八％高）であり、逆に低い政党は自民党（三・七％低）・民社党（二・九％低）、および無所属（一・四％低）である。また、候補者別得票率で同じように比較してみると、六日町の方が高い候補者は三宅正一（一一・八％高）、真貝秀二（一・三％高）、大野市郎（〇・九％高）、古川久（〇・八％高）であり、反対に低い候補者は小林進（五・九％低）、片桐政美（二・九％低）、渡辺ひでお（二・六％低）、村山達雄（一・九％低）、田中角栄（一・五％低）である。

新潟県議会選において南魚沼郡選挙区は、昭和五十四年四月八日執行、五十年四月十三日執行の過去二回いずれ



第7表 衆院選の党派別得票数

党 派	第三区全体		六 日 町	
	得票数	得票率	得票数	得票率
自 民 党	110,628	(24.3)	3,364	(20.6)
社 会 党	108,337	(23.8)	4,857	(29.7)
共 産 党	18,154	(4.0)	870	(5.3)
公 明 党	23,914	(5.2)	989	(6.0)
民 社 党	24,966	(5.5)	428	(2.6)
無 所 属	169,556	(37.2)	5,849	(35.8)
計	455,565	(100.0)	16,357	(100.0)

資料：新潟県選挙管理委員会，1977，昭和51年12月25日執行衆議院議員総選挙『選挙の記録』，p.108 から作成。

第8表 衆院選の候補者別得票数

候 補 者	第三区全体		六 日 町	
	得票数	得票率	得票数	得票率
小林 進(社会党)	54,302	(11.9)	980	(6.0)
田中 角栄(無所属)	168,522	(37.0)	5,806	(35.5)
渡辺ひでお(自民党)	40,188	(8.8)	1,018	(6.2)
片桐 政美(民社党)	24,966	(5.5)	428	(2.6)
高田 かん(無所属)	1,044	(0.2)	43	(0.3)
古川 久(公明党)	23,914	(5.2)	989	(6.0)
村山 達雄(自民党)	37,107	(8.1)	1,012	(6.2)
三宅 正一(社会党)	54,035	(11.9)	3,877	(23.7)
真貝 秀二(共産党)	18,154	(4.0)	870	(5.3)
大野 市郎(自民党)	33,333	(7.3)	1,344	(8.2)
計	455,565	(100.0)	16,357	(100.0)

資料：第7表と同じ。 pp.102-5から作成。

第9表 六日町議会の党派別構成

党	派	
社会党	党	3 (10.0)
公明党	党	1 (3.3)
共産党	党	1 (3.3)
無所属	属	25 (83.3)
計		30 (100.0)

資料；六日町選挙管理委員会1977, 「年度別・選挙別候補者の得票数に関する調」から作成 (昭和52年4月17日執行六日町議会議員一般選挙)。

も無投票で、それぞれ南雲順一 (自民党・梅沢秀次 (社会党)、桜井新 (自民党)・今成雄志郎 (社会党) が当選している。それ以前、昭和四十六年四月十一日執行の選挙では、高橋半左衛門 (自民党、得票数一五九四九票)、桜井新 (自民党、得票数一三六六六票) が当選し、今成雄志郎 (社会党、一三〇一四票) が落選している。

以上、衆議院選、県議会選との関連で六日町をみてきたが、つぎに六日町議会を中心にみてみよう。

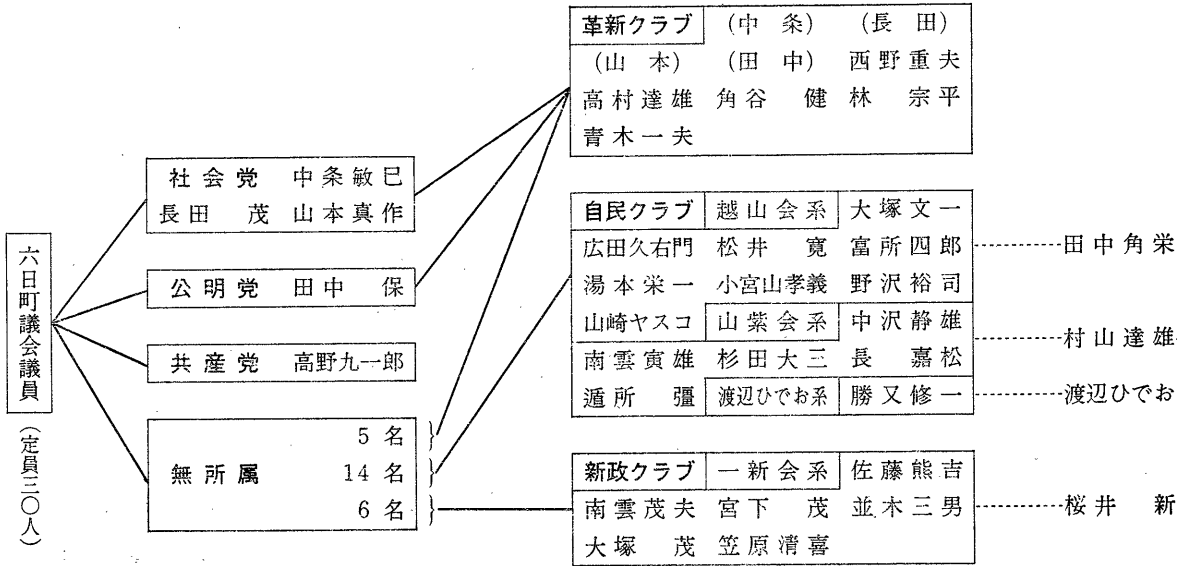
まず、当町議会の党派別構成をみよう。

第九表にみられるように、六日町議会の党派別構成比は社会党一〇%、公明党三・三%、共産党三・三%、無所属八三・三%である。この比率は新潟県全体の町村議会のそれ (第六表参照) と比較して、社会党は高く (七%高)、無所属が低い (五・四%)。無所属の議員二五人のうち、保守系は二〇人、革新系は五人である。したがって、当町議会議員三〇人を保守系と革新系とに大別すれば前者は二〇人 (六七%)、後者は一〇人 (三三%) となる。

つぎに当町議会の党・会派別構成をみてみよう。

第一図から分かるように、革新クラブは共産党を除く社会党 (三)、公明党 (一)、無所属 (五) から構成されており、九名の議員からなる。自民クラブは無所属の一四人から構成されており、さらに田中角栄の越山会系 (八)、村山達雄の山紫会系 (五)、渡辺ひでお系 (一) に細分される。新政クラブは無所属の六人から構成されており、

第1図 六日町議会議員の党・会派別構成



※注 ( ) 内は再掲者である。

資料：六日町議会場の座席表から作成。ただし、越山会系・山紫会系・渡辺ひでお系の議員については住民からの聴き取りによる。昭和52年4月17日執行六日町議会議員一般選挙当選者をもとに作成。

当時の県議会議員桜井新（昭和五十五年六月、衆議院当選）の一新会系の議員である。第一図の内容をもう少し詳しく説明しておこう。議員数の多さは自民クラブ、革新クラブ、新政クラブの順になっている。そして、八人の議員が田中角栄の後援会である越山会系であり、六人が桜井新の後援会である一新会系（昭和五十四年十月の衆議院選への立候補のため県議を辞任したので、一新会から桜井新後援会へと名称を変更したが、ここでは一新会という名称をそのまま使用する）であり、五名が村山達雄の後援会である山紫会系である。また、桜井新は越山会の元幹部であり、最近まで越山会と一新会とはオーバー・ラップしており、少なくとも昭和五十二年四月十七日執行の町議選時には協力関係にあったと思われる。実際、桜井新は田中角栄の弟子であった当時、「ミニ角栄」という異名をもったほどであった。しかし、昭和五十四年十月の衆院選への立候補を表明してから越山会と桜井新との間に対立がみられる。<sup>①</sup>

つぎに、当町議会議員の党・会派別得票数をみよう。

第一〇表から分かるように、各党の得票率は社会党九・九%

第10表 六日町議会議員の党・会派別議員数および得票数

党・会派別	議員数	%	得票数	%	備考
革新クラブ	9	30.0	4,470	30.0	田中 角栄 村山 達雄 渡辺ひでお  桜井 新
社会党	(3)	(10.0)	(1,471)	(9.9)	
公明党	(1)	(3.3)	(454)	(3.0)	
無所属	(5)	(16.7)	(2,545)	(17.1)	
自民クラブ	14	46.7	6,571	44.1	
(無)越山会	(8)	(26.7)	(3,735)	(25.0)	
(無)山紫会	(5)	(16.7)	(2,340)	(15.7)	
(無)渡辺ひでお	(1)	(3.3)	(496)	(3.3)	
新政クラブ	6	20.0	3,365	22.6	
(無)一新会	(6)	(20.0)	(3,365)	(22.6)	
共産党	1	3.3	510	3.4	
計	30	100.0	14,916	100.0	

資料；第9表と同じ。( )内は内数である。

(一四七二)、公明党三・〇% (四五三)、共産党三・四% (五一〇)、無所属八三・七% (一二四八一)である。そのうち、全得票数からみて革新クラブは三〇・三% (四四七〇)、新政クラブは二二・六% (三六五三)、自民クラブは四四・一% (六五七一)である。さらに、全得票数からみて、自民クラブは越山会系二五・〇% (三七三五)、山紫会系一五・七% (二三四〇)、渡辺ひでお系三・三% (四九八)に分かれる。

ここで越山会田中角栄と六日町議会との関係をみてみたい。越山会は六日町議会八名の議員をもち、得票数の二五%を得ている。この越山会議員の優位は新潟県人の県民性、裏日本・雪国という地理的環境、および田中角栄のパーソナリティという主たる三つの要因の組合せからくるものである。『新潟県人の性格は一言で言えば粘り強く、勤勉だが、地味。しかしきわめて実利的だという面を持っている』<sup>④</sup>といわれる。この実利性と物理的生活環境(道路、鉄道など)の整備を期待する気持ちが越山会田中角栄と結びつくのかもしれない。実際、新潟第三区にある三三市町村のうち二一の市町村長も越山会系であるといわれる<sup>⑤</sup>。

## おわりに

本稿では地方議会の党・会派別構成について越山会や一新会所属議員の数字の上だけのことしか扱えなかったが、ある程度の派閥構成が把握されたといえよう。だが、この試みは必ずしも成功したとはいえない。つまり、党・会派別構成を派閥としてみようとするかぎりは、地域社会や地方議会という公共、公的な社会的な場において、なんらかの社会的資源を獲得したり、擁護したりすることを目的とした非公的・非公認の集団であることを明らかにする必要がある。そのためには、今少し時間と資料の収集を要する。

註

- ① 「朝日新聞」、昭和五十五年六月二十日付。
  - ② 同右、昭和五十四年四月十日付。
  - ③ 同右、昭和五十四年四月二十四日付。
  - ④ 「新潟県議会議員名簿」（昭和五十四年五月十七日現在）。
  - ⑤ 新潟日報社、一九八一年一〇月、『新潟県年鑑——一九八二年版』から算出。
  - ⑥ 同右。
  - ⑦ 西平重喜、一九七二、『日本の選挙』、至誠堂、一九四一七頁にみられるように昭和二十二—三十八年の間、九〇%を前後している。
  - ⑧ 「朝日新聞」、昭和五十四年四月十日付。
  - ⑨ 資料は新潟県選挙管理委員会、新潟県議会議員一般選挙、「市町村別・党派別得票数一覧表」、「選挙区別・市町村別候補者得票数一覧表」、「投票状況の確定速報集計表」など。なお、昭和四十六年四月十一日執行の市町村別・党派別、および市町村別候補者の資料は入手できなかった。
  - ⑩ 越山会の言い分はつぎのようである。田中先生はロッキード事件の被告の身であり、苦しい時である。この困った時こそ、われわれ越山会は先生を助けねばならない。そして、これまでの恩に報いねばならない。このような時に、先生にとって不利になるような行動をとる桜井は許せない（ある越山会幹部のことば）。
- それに対して、一新会の言い分はつぎのようである。一新会は表立って越山会田中角栄を決して批判していない。むしろ、越山会からの批判に対して受身的である。新潟第三区では「田中候補批判派を、一般有権者から探し出すのは、むずかしい。圧倒的な『田中人気』の前に、共産党を除く各候補者も正面切つての批判をさし控える選挙風土なのだ」（朝日新聞、昭和五十四年九月二十四日付）。ただ、越山会田中角栄に対する批判らしきものは、田中が真の地元代表ではないということである。その理由は、田中が雪の新潟に住んでいないということである。「魚沼から代議士をだそう」が、一新会のスローガンである。

桜井新が県議を辞任して衆院に立候補したのは、三区の前自民党代議士大野市郎との接触であると地元ではいわれている。

- ⑪ 祖父江孝男、一九七一、『県民性——文化人類学的考察』、中公新書、一三八—九頁。
- ⑫ 越山会田中角栄の内容、および市町村長との結びつきについて述べている読みものはつぎのようである。桜井善作、一九七七、『新潟3区——たったひとりの市民運動ノートから』、一九七九、『続新潟3区——今こそ市民運動の波を』、主婦の友出版サービスセンター。小林吉弥、一九七九、『実録・越山会』、双葉社。佐木隆三、一九八一、『越山田中角栄』、徳間文庫など。

